

びわこの 考湖学

琵琶湖最北端の地「塩津」は、巨大な琵琶湖を南にとらえた風光明媚なところですが、塩津の地名は北陸の海塩を都へ運送する港の意に由来するとされ、日本海側から畿内への陸路と水路の接点となり、要の津として機能し、大いに繁栄しました。

7)年の琵琶湖の船舶や船員を記した『江州湖水諸浦船員数帳』によると、運搬の主流であった大型の「丸子舟」の保有数は塩津125隻とあり、主要港に数えられました。

こうして繁栄をみせた塩津ですが、明治17(1884)年に敦賀―長浜に鉄道が開通して以来、昭和13(1938)年の定期連絡船が途絶えたのを最後に、静かな湖畔の集落へと変貌していきました。

古くは天平宝字8(764)年の藤原仲麻呂(惠美押勝)の乱に登場し、平安時代中ごろには越前に向かう父に伴った紫式部が塩津の神社に旅の安全祈願をしたことでも知られています。

現在の塩津浜の集落には、敦賀―塩津を結ぶ街道筋を中心に100軒余の民家が並んでいます。集落の北端入り口付近には常夜燈があります。天保5(1834)年に建立された石燈籠で、「海道繁栄馬持中 世話役 九ヶ村役人中 五穀成就」と刻まれています。塩津周辺の9つのム

最近の発掘調査では、集落の西方を流れる大川河口部の中洲上に平安時代の神社跡が発掘され、積み荷をなくさないことを神仏に宣誓するたいへん大きな木札(起請木簡)が多量に見えられ、注目を浴びました。

江戸時代延宝5(167

塩津宿場街道の常夜灯と商家

ラの村役や荷駄の運送業者が中心となって建てたもので、塩津浜の間屋はこの九ヶ村の人馬役を差配していた中心的存在でした。燈籠正面の海道繁栄の願文に対し、五穀成就は集落の方を向いて刻まれています。



「海道繁栄…」と刻まれた江戸時代の常夜灯
西浅井町

もう一つ、天保12(1841)年に建てられた石造の道標もあります。「左いせ たくミ きのもと すぐ竹生島 大津 諸浦出航」と記されており、物だけでなく旅人の主要な拠点であったことを示しています。

南北に長い集落では宿場町の風景が約1kmにわたって続き、南端で突然視界が広がります。琵琶湖が眼前に現れます。現在は国道8号を隔てて琵琶湖となりませんが、かつて道路がなかったころはすぐ近くまで舟が寄せられ、集まった舟からはたくさん荷物の積み降しをしていたのです。



宿場町だったころの繁栄を伝える造り酒屋「沢屋」
西浅井町

文化や行政文書、情報も塩津港を経由していたのでしょう。最盛期の寛永年間(1624~1644)には30万石もの米がここを通り、街道には馬や大八車が盛んに往来して「上り千頭 下り千頭」と言われるほどでした。

街道沿いには廻船問屋や蔵、旅籠(宿屋)、醤油屋などが軒を連ねていました。いまもその姿を留める造り酒屋「沢屋」は、商家らしい瓦葺きの妻入りで、庇が付き、2階には出格子が2カ所、壁は柱や梁を露出させた白漆喰、重厚で格式を感じさせるつくりです。こうした今も残る宿場町のたずまいは往時のにぎわいを感じさせます。

塩津へは、JR北陸本線近江塩津駅より約2.5km、木ノ本駅より約5km。北陸自動車道木之本ICより車で約10分のところですが。

(滋賀県文化財保護協会 中川治美)

船の時代 の繁栄ほうふう